

「テスト作成システム」と 「単元プリント」の活用

この連載では、全国各地の中学校でお聞きした、補助教材を活用しながら、生徒のみなさんの学力向上に向けて工夫されている取り組みをご紹介します。

第11回目となる今回は、「テスト作成システム」で作成した中間テストと、「単元プリント」を併用した取り組みをご紹介します。

事例

生徒に対する公平性担保と 教育の質の確保

岐阜県での取り組み事例

生徒に対する公平性担保と 教育の質の確保

岐阜県養老町立東部中学校

岐阜県養老町の南東部に位置する同校は、1980年に開校。現在の生徒数は351名です。「強く・豊かに・生き抜く生徒～自主・協力・鍛練～」を学校目標に掲げ、教員の働きかけで学習規律の徹底と「聞く・書く・話す」力の育成をめざしています。また、タブレット端末を活用した授業工夫、身につける力を明確化したGIGAスクール構想の推進を行っています。



今回取材にご協力いただいた、校長の久富雅仁先生。



6月に行われた体育大会の前日の様子。実に3年ぶりの開催となりました。前日練習では、全校生徒で組む円陣の中央でリーダー役の生徒たちが、気合いの入ったかけ声をかけました。

取り組みの背景とねらい

当校が、3年前から「テスト作成システム」で中間テストを作成して総括的評価を始めたのは、生徒に対する公平性を担保するためです。

もともと岐阜県では形成的評価は出版社が発行する単元プリント教材を使用し、定期テストは先生が自作していました。

テストを作成する先生によって出題に偏りが出るのは、生徒のために良くありません。出題が教師の主観に左右されないことがまず大事だと考えました。

また、教師がテストを自作する場合、大変な労力が必要です。作成して見直すことを繰り返し、一回の問題を作成するまでには膨大な時間がかか

ります。また、どんなに気をつけても、実施当日に誤りを発見することもあります。そうすると、また修正の労力が必要になります。

「テスト作成システム」は、それらの負担を軽減してくれます。また、問題に加えて解答用紙も自動で作成することができます（下部参照）。物理的な負担ももちろん軽減されますが、問題作成から実施までにかかる精神的負担が軽減されていることが大きいと感じています。

成績評価において評価の質を上げるため、評価方法や観点が適切なものだったか見直しを繰り返します。その中で、先生自身の評価方法が適切なものか客観的に確認する手段として、このシステムを使用することが有効なのではないかと思い、採用にいたりました。

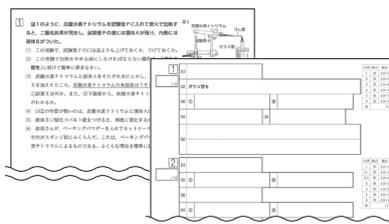
テスト作成システム

●問題選択画面



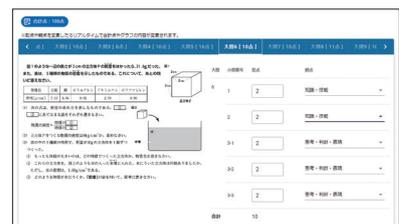
教科書ページや配点、小問数、難易度、主学態の出題有無等を選択します。

●問題と解答用紙(サンプル)



選択した条件にあわせて、問題・解答用紙・解答が作成されます。問題の差し替えも可能です。

●配点、観点変更画面



各小問の配点と観点を変更できます。

先生方には、教材研究など、本来やるべきことに時間をかけてほしいです。「働き方改革」のもと、勤務時間を適正化することはもちろん大事ですが、教材部会などでの指導内容の検討など、時間をかけるべきことには力を注ぐべきだと思います。

取り組みの詳細

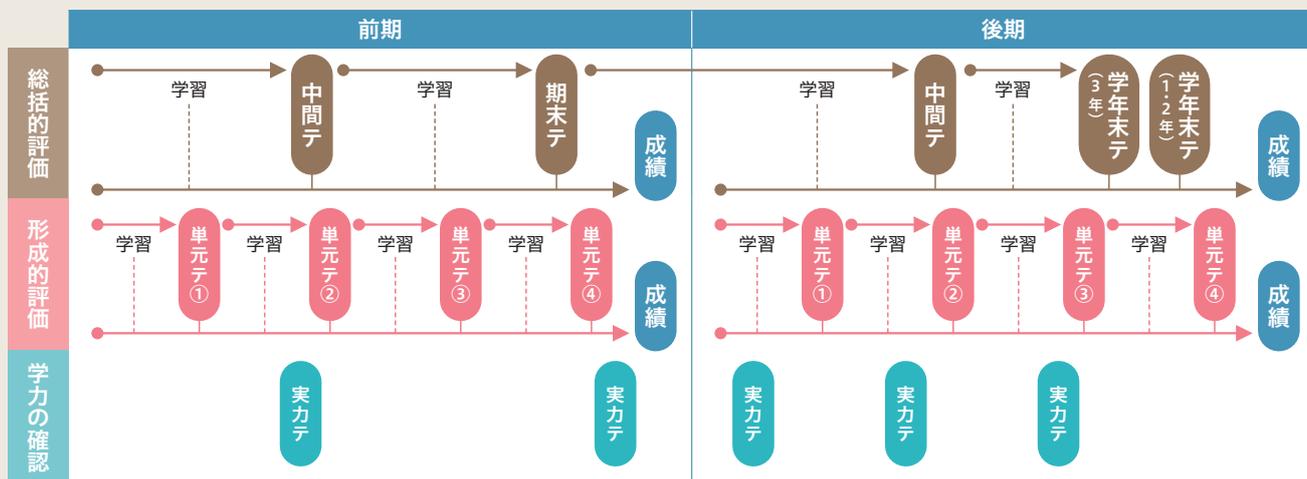
評価の対象にしているのは、中間テスト・期末テスト・単元テストで、評価の比重を検討し、偏りが出ないように配慮しています。実力テストは、生徒の力を測るために実施していますが、評価には加えていません。

また、テスト自体の質はもちろん大切ですが、重要なのは、テスト後の生徒へのフォローだと私は考えています。

当校では、教育相談をこまめに実施しています。仮にテストの得点が同じだとしても、その原因は、勉強法がわからないためなのか、学習事項の定着に問題があるためなのかなど、生徒によって異なります。それを担任と一緒に考え、時にはノートを持ってこさせてやりとりをしたり、勉強法のヒントを出したりして、フォローしています。

私自身は担任のとき、成績をレーダーチャートにまとめ、三者面談で使っていました。数字で見ると、図で見た方がわかりやすく、説明もスムーズです。指導の際、そういった資料があるとありがたいですね。

▼東部中学校の評価スケジュール(一例)

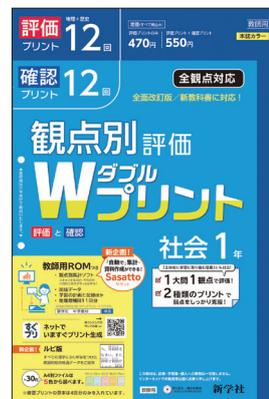


単元プリント

Wプリント

1大問1観点で構成。3観点の評価をはかる「評価プリント」と、その予習・復習として取り組める「確認プリント」のダブル使いができます。

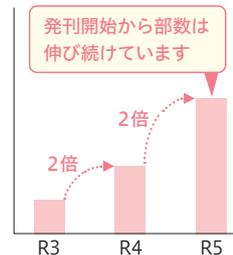
※「Wプリント」は、採点した問題用紙をスキャンしてソフトで読み込むと、自動で得点が集計されます。



テスト作成システム



問題データベースから問題を選定し、WEB上でテスト問題が作成でき、生徒数分印刷したものが納品されるシステム。



<https://print.sing-demo.jp>

ID demo
Password singdemo

保護者への説明とその反応は

定期テストの作成の一部に「テスト作成システム」を使用することについて、保護者には文書で説明をしました。

説明したのは、次の項目です。

①定期テスト作成の現状

現在は、教科担任が自力でかつ独自に作成していることを率直にご説明しました。

②作成システムを使うことのメリット

→偏りの解消

作成者によりテストの出題に偏りが出ることが解消され、学習した内容をまんべんなく出題できるようになることを説明しました。

→安定したテストの実施

システム内で教科書の範囲を指定することで、今までのように学習内容に沿ったテストができることを説明しました。

③実施のスケジュール

まずは試験的に一部の教科（各学年1教科）で実施し、次の年度からは5教科（国語・数学・理科・社会・英語）で使用する予定であることをお知らせしました。

④費用

1教科にかかる費用と、それを学習費から支出することを述べました。

保護者からは、特に反対の声は聞かれませんでした。業務の最適化が叫ばれ始めてしばらくたち、一般社会でも業務の効率化やデジタル化が日常的になってきたことも背景にあるかもしれません。

ICT活用にあたっての今後の課題

ICTの活用については、今後どのように対応していくかを探っている状態です。

先生たちの実状を見ると、ICTを使いこなせている人と、そうでない人との格差があることがわかります。また、成績処理や通知表をつくる「校

務支援システム」を導入してしばらく経ちますが、それに慣れるまで時間がかかり、本来なら業務が軽減されたはずなのに、実際には余計に負担がかかってしまっているケースも見られます。先生同士が、成績やテストのデータを負担無く共有できるようなシステムがあればよいのかもしれませんが。

授業については、先進校の事例などで、学習を進めるときに、生徒がデジタル機器をツールのひとつとして、利用するかどうかを判断しているのは良いことだと思います。しかし、本校でその取り組みを採用したいと考えたとき、たとえばタブレット端末などに同じソフトを入れることができるかと言えば、必ずしもそうとは限りません。かといって、代替手段を探そうにも、それを相談する先が見つからないという新たな問題が生まれてきます。

そして現場では、デジタル機器を単に利用することから、実際に活用できるようになるためには何をすればよいのか、議論が始まっています。

業務の効率化については、さまざまな取り組みや事例を見て、多様なことができることはわかるものの、いざ実践となると、まだ追い付けない部分があります。

教育の「質」を置き去りにしないために

時代や社会の要請もあり、業務の効率化を進めることは必須事項だと感じています。その例として、学校の対応時間が変わりました。今は午後6時には校内を施錠します。職員室の電話も留守番電話に切り替わり、外部からの連絡を受け付けなくなっています。もちろん、緊急事態が発生した場合などは、その限りではありません。

しかし、業務の効率化を追い求めた結果、教育の「質」を置き去りにしてはいけません。デジタル化によって省略することばかりが良いことでは決してないはずで

仕事の効率と質、教師の熱意と労務管理。それらのバランスをどのように取るか。慎重にポイントを見極めていきたいと考えています。